

紀伊・房総

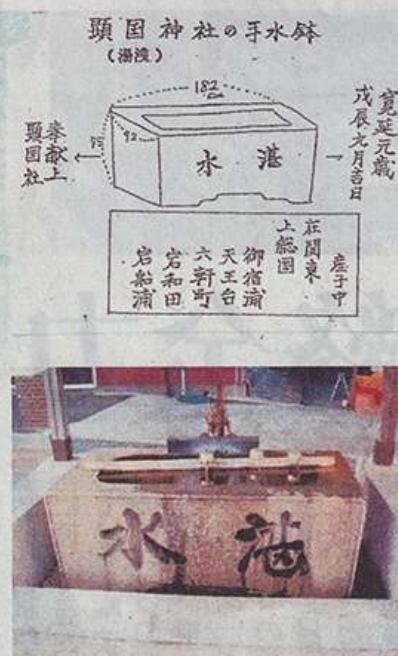
1

卷之六

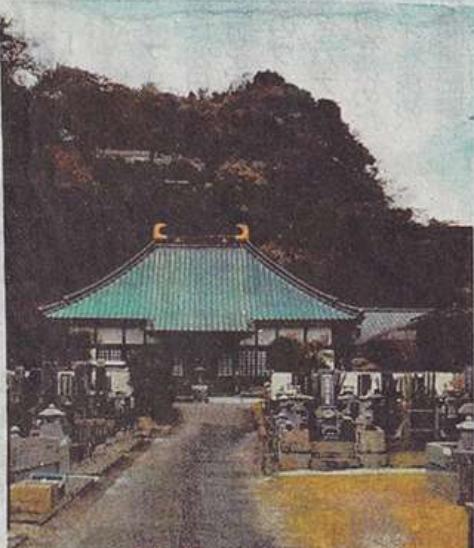
◇13◇

房総半島東側の中ほどにある千葉県御宿町は旧上総国大多喜城の直轄領が多かつたが、紀州漁民によつて漁村が開発されたと町長か

たものがあると案内を
いただいた。早速、御
宿の地名の由来となつ



手水鉢は顯国神社HPより。左は最明寺



畏れの心 手水鉢に

喜兵衛。寛延3年(1750年)11月6日湯浅・六治郎などが目に留った。町史誌によると、和歌山市加太浦の漁民・大甫七十郎が川津浦(勝浦市)で八手網による鰯漁で大漁であったので、翌年元和3年(1617年)に湯浅村の貝栖村助右衛門らを引きつれて、岩和田、船谷(共に御宿町)にて漁労をはじめたとする。150年

て、九十九里浜近くの族の守護神として、海岸線に立つた絶壁にかかる階段をくの字に下りると、中腹にお堂が建ち、風化しかかった扉を開けると、風化した磨崖仏とそのレプリカ像が鎮座、問題の手洗い鉢も施主の文字は読めなかつた。昔はここに萱葺きの小さな堂があつて住職がいたとのこと。の大津波や鰯の不漁続

現在地に勧請されたもので、江戸時代には、湯浅、別所、青木、山田の4村の産土神として信仰を集めていた。

多分、手水鉢の顯国神社への奉獻も、津波や不漁の畏れからの所作と思われ、コロナが蔓延する今日、人間の力で予防できない天災や森羅万象に常に謙虚であらねばと思つた。

た最明寺の元住職の松崎さんを訪ねた。鎌倉時代に北条時頼が諸国行脚をした際、宿泊されたのが最明寺だと御宿の由来を聞いたのち、紀州漁民の記録を拝見。元禄16年（1703年）11月23日湯浅・八兵衛（津波の犠牲）。正徳2年（1712年）3月3日湯浅長三郎納屋佐治治兵衛。元文4年（1739年）6月13日湯浅・

た前の江戸時代の漁労が目に浮かぶ。本堂に通されると、法会に使う鉢の双盤を取りだし、裏面に施主が淡路国の大名があることが示された。更に紀州漁民との関わりをもとめると、御宿町浜区にある堂坂薬師の施主が湯浅村宇ノ助と書かれていたと云う手洗い鉢を紹介してくださった。所在地が分かりにくいので、地図を描いていただきたい

前年の江戸時代の漁労がの薬師さんへの信仰も一層強くなつたと思われる。次に紀州漁民の本拠地・湯浅町の頭国神社の鳥居をくぐり、を目指す手水鉢の裏側に立つと、御宿岩和田 岩船の銘が刻まれ、寛延元年（1748年）とあった。何代か前の御宿町長も最明寺の松崎さんとともに、顕国神社を訪ねたという。同社は湯浅一

顕国神社を想う紀州漁民と最明寺

絵と文・熱田親憲

題字・熱田秦華